福井県内科医会学術講演会座長コメント（平成 27 年 12 月 19 日）

福井県済生会病院内科主任部長　　岡藤　和博

演題名　　迫りくる感染症の脅威　－感染症危機管理の重要性とそのポイント－
演者　　東北大学大学院医学系研究科　総合感染症学/感染制御・検査診断学　教授
　　賀来　満夫　先生

初めに、感染症についての現状を示され、危機管理の 3 つのポイントを挙げられた。現状として、WHO の警告（1996）の「我々は今や地球規模で感染症による危機に瀕している。もはや、どの国も安全ではない」を述べ、エボラ出血熱大流行の話へと進まれた。この中でエボラ出血熱は、料理として提供されるコウモリに由来するウイルス感染症であること、出血は 20%程度であるが、下痢が 66%、嘔吐が 60%に見られ、この時期に感染リスクが高いことを強調された。また、感染拡大の理由として、初期対応の遅れ、一般的な衛生状態の問題、標準予防策の不備、感染症に対する知識不足、人の移動（流入）などが挙げられた。次いで MERS（中東呼吸器症候群）・コロナウイルス感染症になった。ここでは、感染源が、中東では神として扱いされるヒトコブラクダであること、臨床症状としては、インフルエンザ様症状に加え、1/3 に下痢・嘔吐が見られることを示された。次に鳥インフルエンザ A（H7H9）に進まれた。鳥に対しては低病原性であるため不顕性感染が多いと考えられるため、人へのリスクとなる可能性があると論じられた。また、抗インフルエンザ薬の効果が期待できるとのことであった。最後に、薬剤耐性菌のアウトブレイクが頻発しており、抗菌薬神話の崩壊が始まっていること、耐性菌が増えても症状が出ていない、サイレントパンデミックという認識が必要であることを述べられた。

これをふまえて、危機管理のポイント 1 として、感染対策に対する意識改革を挙げられた。この中では、SARS を例に、医療施設が伝播の場となるリスクが極めて高いことを全員が認識することを強調された。ポイント 2 では、早期発見・早期認知のために注意喚起の徹底や渡航歴などの病歴聴取の必要性や、感染伝播予防の徹底として、手洗い、消毒薬、マスク、環境衛生と順番にリスクを下げていく考えを持つことを,研究報告をもとに示された。そして、髄膜炎菌感染症やインフルエンザ（2009 パンデミック AH1N1）等を例に、的確な抗菌化学療法の使用の有用性を述べ、重症病態マネジメントとして、救急医療・集中治療部門との連携・協力をえたトータルマネジメントの実践を述べられた。ポイント 3 では、地域連携・ネットワークの構築を挙げられた。感染症の問題は、医療関連施設に留まる問題ではなく、社会に広がる問題であり、医療関連機関や行政、医師会等とリスクコミュニケーションを構築し、感染制御に社会全体で取り組むべきであり、演者らは、仙台市から宮城県、東北に広がるネットワークを構築していると述べられた。

感染症の脅威についての最新情報を講演されたが、感染症はすべての壁を超えるものであり、その対応は、個人から、地域へ、国へ、世界に広がり、さらに動物へも広がるものが求められる時代となっていること、そして、それを支えるためには社会全体を結ぶネットワーク体制（人のネットワーク）が最も重要であると教えられた講演であった。